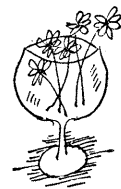


人間とは何だろう？

—その最底点の記録—



深 津 文 雄

論文——ということですが、

本でよんだことや、頭でかんがえたことよりも、むしろ私の場合、いのちかけて作りあげてきた村のはなしでも書かせていただいたほうが、はるかに皆様にとって、御参考になるのではありますまいか？

そう、かけはなれた、関係のない、とおいかなたの出来事——ではないと思いますが……

本誌一月号の巻頭において、堀内康人先生が『キリスト教保育』（一九七七年六月号、七月号）に掲載された、「かにた婦人の村」のことをとりあげ、「こうした貴重な記録は、……（中略）……どんな幼児教育誌にも転載してほしいということだ。何故そんなことを開口一番申すかといえは、幼児教育にたずさわらずさわるうとしている人々に基本的に考えていただきたいことが、この記録の中で見事に生き生きと描かれているからだ」と述べていらつしました。

そこで、キリスト教保育通盟 ならびに著者の深津文雄先生の御諒解を得て、一人でも多くの保育者の目にとまるよう、本誌に転載させていただきました。

—編集部—

とこ？

日本で——というよりも、おそらく世界で——ただひとつ、「婦人の村」とよばれるところが、房総の南端にあるのです。

房総の南端といえば、野島崎灯台のある白浜をおもいうかべるかたも多いこととおもいます。その向こうは、ひろいひろい太平洋で、水平線さえもが円くみえるところです。そのうしろの山ひとつ越えた反対がわ、夕陽の美しい内海をみおろす丘のうえに、この「婦人の村」はたっているのです。

注意ぶかいかなら、館山の駅のあたりから、連なる山々の中腹に、点々と、その家々を見つけられるはずで

駅前から出ている国鉄のバスにのれば、二〇分あまりで到着します。

タクシーののって、「かにた」とおっしゃれば、だれでもよく知っていて、玄関前まで上ってきてくれます。

だれ？

「婦人の村」というのですから、いずれ、女性があつまって暮らしているところにちがいないのですが、それが、だれかの主張に共鳴してとか、婦人解放のためにとか、なにか作ろう、なにかしよう……というのではないのです。

みなさまのような、健康な、才能にめぐまれ、条件にめぐまれ

たかたがたには、おそらく想像もできないほど、不運な、不遇な、不健康な、能力にかけた婦人たちが、全国から一〇〇人ちかく選ばれて、送られてきた所なのです。

なにをしていたひとびとが？

それが、お話にならない、売春なのです。自分の肉体を金銭で売ってやつと生きつづけてきた、実にみじめな婦人たちの、またそのクズなのです。

年齢をいえば、一八歳から五三歳まで（これは、来たときのトシです）、知能指数で測ってよければ、二〇未満から七〇ぐらいまでがほとんど、病気は圧倒的に精神病がおおいのです。精神病でないひとでも、まるで気が狂っているような奇行を呈します。

……こう申しあげただけで、みなさままきつと身震いなさるでしょう。現に、ヴォランティアとして労働奉仕にきてくださったお嬢さんなど、食堂にはいつて、その異様なふんい氣にふれただけで、食べものがのどをこさなかったとおっしゃいました。実は、わたくしども、はじめは、そうだったのです。

なぜ？

そういう、いろいろな意味で障害のおもいひとびとを、一カ所にたくさん集めることは危険だ——と、評論家たちはいいます。

マイナスを集めれば集めるほど、陰圧はおおきくなるからです。目立たないように、社会のなかに、バラまいたほうがよい。そのほうが、本人にとっても、差別にならないし、拘束にならない……というのです。

しかし、それは、社会が何であるか——によってちがうのです。たとえば、知能のひくい人が、普通の社会に一人おかれますと、何をしてもほかのひとにかないませんから、だんだん劣等感がおおきくなって、その人のもっている能力ものびません。ところが、おなじぐらい低いひとばかり集めますと、はじめて劣等感から解放されて、すくすくと伸びはじめます。

ましてや、非行にはしりやすい人を、誘惑のはげしい社会に野ばなしにしておいてはいけません。清潔な、明るい、思いやりのある環境をこしらえて、そこへ移せば、もともと悪い人っていないのですから、長いあいだには直ります。

ことに売春のような、その人を社会におけば、どんどん悲惨をうみだすような場合、まず隔離することが第一です。隔離しておいて、それから犯罪の再発をふせぐように指導するのですが、その原因が彼女たちだけでなく社会のがわにもある場合、社会復帰はそう簡単にはおこなわれないのです。

ごぞんじないかたには、まるで社会が正しいものであるかのよ

うな錯覚のうえに立って、社会復帰、社会復帰——とおっしゃいますが、私たちには、まるで、狼が口をあけて、オリににげこんだ羊に、出てこい、出てこい——と呼んでいるようにしか思えません。

どうして？

まったく何もできない——

これが、彼女たちがこの村におくられてきたとき送致書にかいてある評価です。ですから、役人の目からみれば、どうにもならない、生きている必要のない人々なのでしょう。むかしなら、とくに遺棄されたり、殺されたりしていたことでしょう。

しかし、いまでは、外国のまねをして、そういう人たちでも生かしておかねばならぬことになったので、役人たちはオカイゴロシとよんでいるのです。とにかく、ひとり送ってくると、委託料として何万円かのお金、もとの都道府県から支払われる仕組みです。

そのお金めあてにこういう仕事をしたがる人もでくる——といけないうので、この委託契約の条項は、きわめて厳しいものです。たとえば、家をたてるといっても、土地は全部ジマエ、建築費も四分の一——というが実際には半分以上——はジマエ、

そして運営費もありうる最低、食費もやっと生きられる程度——この物価高に、一日一人四六五円——なのです。でも、感謝しなければなりません。むかしは、その費用さえ全部ジマエだったのですから……。

国家が、とにかく、こういう人々の責任をもとうということになったのは、たった二十一年まえからのことです。売春防止法という法律が、ながいながい廢娼運動の結果、衆参両院を通過してからのこと。矢島攝子とか、久布白落実とか、山室軍平とか、戦後の婦人運動家たちに、どれだけ御礼をいっても言いきれないのです。

かんがえてみると、神代いらいオンナならでは夜のあけぬ国といわれた、世界最大の売春国日本で、こんな場ちがいな法律が一本できてしまつて、それまで売春業者と結託していた政府が、それ以来、売春を惡とし、業者を罰し、業婦を解放し保護するようになったことは、まるで太陽が西から昇るほどの奇跡なのです。それを、わたくしたちは笑つて見ていいはずありません。

わたくし？

ある朝、いつものように、読むともなく、新聞のおもてをながめてみると、

「久布白落実女史が長い戦いに勝った御褒美に、その年数を日数になおしたほどの欧米視察をさせてもらつて帰つてこられた」というような記事が、目のなかにとびこんできました。

すると、わたしは、ながい物憂さから覚めた人のように、立ちあがつて、彼女にあいにゆきました。そして、この明治・大正・昭和と、日本の近代化のなかに、キリスト教がうちこんだ、もっとも深いクイを守らなければならない責任をかんじたのです。

もともと、わたくしは、社会運動というようなものを輕蔑していました。教会政治も、教会営業も、取るにたりない。学問は好きですが、学者とつきあうのは骨がおれます。ひとりで歌つたり祈つたりしているのが一番シヨウにあうのですが、ついつい引っぱられて奉仕女たちの先にたち、奉仕女にできる仕事は何だろうと考えていたのです。

世界最大の売春国にたまたま生をうけ、しかも千載一遇の売春防止法成立にめぐりあわせ、日本女性として同じ女性の黙過したい悲惨に手を貸す——こんなタイミングのいいことはないではありませんか？

ところが、ドイツの指導者に相談してみると、「すめられない」というのです。売春婦更生の仕事はヨーロッパにもあるが成功していない。生まれたばかりの、一〇人そこそこの日本の奉仕

女の手におえることではないのです。

「そんなら、せんせい、やりましょうよ！」これが、そのころの若い奉仕女の意気でした。

しかし、結婚の経験すらない奉仕女が、海千山千といわれる売春婦の世話をどうしてするのでしょうか？ ほんとうに心配でした。

わたくしたちは、いろいろと研究もし、実習にも、見学にも、出てゆきました。

そして、先輩たちの仕事の邪魔にならないように、できるだけ、他所で取りたがらない障害のおもい対象をひろううちに、ひろいところで、ながいあいだ、ちょうど子供をあそぼせるように、やってみたら……と、コロニーを提唱し、「かにた婦人の村」をつくったのです。

かにた？

「かにた」——というのは、そこを流れている小さな川のなまえです。ほんとうに、赤い、かわいい、カニがでていますよ。

六〇〇〇年まえには、この山のふもとまで、海がきていたともわれる、このあたりは、いたるところに洞窟があります。そのどれかは先史時代にさかのぼる遺跡ではあるまいかと思われま

が、太平洋戦争中に予科練のおにいさんがたが防空壕にしてしまった、研究は困難です。

戦争がおわって二〇年ちかく、まったく放ってあった砲台あとに、厚生省の課長の案内で分けのぼったとき、わたしは、

「こんなところへ来たくない」

と言いました。平らな所はすこしもないのです。

それに、自衛隊はあるし、漁港はちがいし、とても、元売春婦がのびのびくらせる土地とは考えられなかったからです。

でも、もう、国庫補助金の予算がとれてしまつて、その年のうちに建築をおえねばならぬ——と、おどされまして、決心しました。

来てみると、気候は温暖だし、住民は親切だし、食物は新鮮だし、病院もおおいし……良いところです。水がすくないのと、崖くずれがおおいのには苦労しましたけど……。

厚生大臣には一〇〇万坪とはなしたのに、いざ封をきつてみると一万坪では、友だちにあわせる顔もない恥ずかしさでしたが、とにかく国有地を売り渡してもらつて、いそいで整地、設計、建築にとりかかりました。

たった一一三〇万円の補助金をもらつて、八一一八万円の仕事をしましたのです。内外に乞食をし、借りられるだけ借りこんで……。

そのころの「コロニーへの参加」というパンフレット、ごらんになったかもあるでしょう。幼児たちとともに、とうとい神にささげられたものを、送ってくださったかたもいらっしやるはず。どうも、ありがとうございます！

むら？

「婦人の村」という呼称は、そのころ生活課長をしておられたかたが、フトおっしゃったものなのです。

わたくしは、「村」というような、地方自治法に規定されている言葉をつかうことは、おがましいと思ったのですが、課長さんがおっしゃる意味は、そんな大それた考えではなく、まったくママゴトの幻想のなかで、知能にめぐまれない婦人たちが、村長だ、村会議員だとよびあう、その愛らしさをめざしておられるのだとわかり、そのまま使うことにしました。

なお、わたくしが、この呼び名で連想したものは、英国などでしきりに言われている小舎制——すなわち、すぐに大きな建物をドカンと建てないで、できるだけ普通の家庭のように、小さな家を離して幾つも建てる方式だったのです。

収容定員ひとりについて三坪という規定でしたが、それでは何とも窮屈なので、五〇パーセントふやして四・五坪にしてもら

い、それも、ほとんど全部、居住面積にあてて、廊下も事務所もおいだしてしまいましたから、とても軽快な居住棟が六つとれました。

ほんとうは、八人用の居住棟を一二つくりたかったのですが、それだけ平地がなく、倍の人数のものになったのは残念でした。でも、とてもよいひとが設計してくださったので、個別性と社交性を兼ねそなえた、独特なスタイルは、ちょっと、どこかのユース・ホステルへでもいったようでした。

そして、この一六人の家族に、一人の寮母を配して、生活に密着した指導をしてもらいました。対象者が子供ならば、お父さんもおほしいところでしょうが、ここは大人ですから、お母さんだけで、とにかく、やってみました。

そのほかに、村の中心になる大食堂と浴場をつくり、管理部門と職員宿舎は、別のお金で、三階につみあげました。

いちばん心配したのは、この村の門や塀です。脱走を防止するためならば、いちおうキチンとした門や塀がなければならぬのですが、お金もなかったのも、おもいきって、全然なしということにしました。それが案外よい効果をうみました。無い塀は、だれも越えようとしなからず。そのかわりに、よい処遇とか、信頼のある人間関係があらねばなりません……。

はじまり？

取れた予算を一年のばし、二年のばし、やっと一九六五年の春には竣工しました。わたしたちは、そのまえに一家でいって、未完成の居住棟にねてみました。そうでもしなければ、永遠に、一畳のタタミ・ベッドの寝心地をためす時はなかったのです。

一年まえから採用しておいた三人の栄養士と一人の園芸士は、ふた月まえから入りこんで、布団づくりに取り組みました。

開設の一週間まえには予定された職員が全部そろいました。われわれ夫婦のほかに、神学校を出て同級生同志結婚した若い牧師が新婚旅行のかばんをここで解きました。もう一組わかい夫婦がいました。ある青年は、社会事業大学にはいったが、社会事業とは何かわからなくなったといって、一年休学して、この仕事に参加しました。そのほかに、内外の奉仕女が六人いました。建築から手伝った地元の農漁民にもくわわってもらいました。

そして、準備万端ととのえて、四月一日の開設をまったのです。が、はじめて迎えた兵庫からの五人は、笑いを忘れた疲れきった婦人たちでした。ひろい食堂のかたすみで、食卓をかこんで歓迎会をしたのですが、ひとりはいっしょいで司会している自分の胸のおくに、これからどうしていったらよいのかという心配が、おもく沈黙するのをどうすることもできませんでした。

こうして、せきをきったように毎日おくられてくる、おちこちの都道府県の収容者をおぼえるひまもなく、四月二六日には、宮様をおむかえして、開所式をとりおこなったのです。

それが、教会ですと、みんなで歌える賛美歌があり、みんなで祈れる祈りがあるわけですが、厚生省や県庁のお役人あいでは、それもおしつけがましいとなると、ただ話だけで、あとは何もないのです。仕方がありませんから、とびきり上等のステレオをかりてきてバッハの管弦楽でもかけ、寮生にはリートミュラーの歌を訳して教えました。

そして、展示するものもあるわけがありませんが、以前から宝のようにしまっておいた寮生の編み物などを、狭い作業棟のなかに並べました。すると殿下は、

「どういう作業をしますか？」

と、おたずねになりました。が、わたくしには、お答えすることばかりありませんでした。

まったく、何をさせても、何もできない人々だったのです。

すきなこと

「かにたは、いいとこだけだよ、しことがない」

彼女たちは、いかにも賢そうに、そういういます。

「しごと——って、なにができるの？」

「もといたところではね、ないしょくしたのよ、袋はりだとか、荷札のヒモとおしだとか」

——そう、ねだられるのがこわくて、わたくしも、なにか、このひとたちのできる内職をみつけておかねば……と、これは大部まえから宿題になっていたのです。

房州へはいると、東京にいたときとちがつてそうそう手内職のような仕事はないのです。でも、家庭婦人で結構いい収入をあげているひとがいる、それはウチワの内職だとききました。なるほど、このあたりには、ほそい篠竹がたくさん生えていて、これを材料に房州団扇をつくらしている工場があちこちにあります。しかし、その作業をみると、とてもとても、うちの婦人で出来そうなことではありません。

あんな、いそがしい生産過程に、われわれが組みこまれたら、それこそ事故の連続でしょう。そして、出来あがった製品は、みんな不合格でしょう。

「もう、いいから、やめてくれ！」

そう言われて、彼女たちは、すべての職場から追いだされてきたのです。いまだ、そのミジメッタラしさを、くりかえすこともないではありませんか？

それに、こういう下請作業の労働には、どういうものか、ほんとうの喜びがありません。ただ、数えるのは、いくつ出来たか、いくらになったか。でなければ、何時間はたらいいたか、もう何分たてば終わるか……。

そして、その労賃たるや、ばかばかしい低さで、勤労意欲をかきたてるどころか、かえって勤労意欲をそぐのです。

「こんな、クタクタになるまで働いて、ひと月これっぽっちなら、水商売のほうがいい……」と。

人間はお金という便利なものを発明した。そして何でもお金にかえると幾らと計算することを覚えた。そして、とうとう、お金につかわれ、お金のために働く奴隷になってしまった。お金のためには、なんでもする、お金にならなければならぬ。

そのとき、わたくしの脳裏にフトひらめいたのは、幼児たちの姿です。わたくしは二五歳のひとりものとき、農村にはいりこんで塾をひらき、やがて幼稚園——戦後は保育所——の園長をした経験がありますが、

「せんせ、おはようございます」

とやってきて、帽子とかばんを釘にかけると、とんでいって積み木の箱をひっくりかえし、止められるまで営々と、つんではこわし、つんではこわしする。あの幼児の労働力——あれをどうして

人間は一生もちつづけることができないのでしょうか？ 自由あそびの時間に子供が展開する、あの意欲的な追究を、なぜ強制的な一斉教育や、おもしろくもないお勉強におきかえねばならないのか？

したくもない勉強をしいられて、生きてる心地もしない試験地獄をとり、何をきいているのかわからぬ講義をブツブツにきいて、学歴を肩に社会にでる。と、一生おもしろくもない仕事に、ただ給料のために通いつづける——そうなるために、あの生命にみちた幼児期があるのだとは、どうしても思えなかったのです。

これは、神様のみころではない！

人間がお金を発明したからいけないんだ。どうかして、お金のために働くのではなく、ほんとうの価値のために創作する人生をとりもどさなくては……。この長いあいだの夢を今こそ実現するときが来たのです。

それには、労働とは金銭のためだ——という考えを捨てさせ、労働とは、それをしたくてたまらないからする遊びなのだと考えさせることが大切です。

「あなたがしたいとおもうことを、したいときに、したいだけしなさい！」

さあ、どうなるでしょう。そんなことで、人間は、ほんとうに

創造してゆくものでしょうか？ それとも、どんどん、悪にはしり、享楽におちいつてしまうものでしょうか？

その答えが、かにた婦人の村一二年の実験なのです。

ゴミとタカラ

「人間この地上に生をうけるかぎり

全く無用のものは存在しない——」

これが、私の信念です。信仰といってもよいでしょう。まず人間に対する……そしてやがて造物主に対する……。

わざわざ厚生大臣のとこまでいって、日本のゴミをひきうけようと言ったのも、その条件が百分の一まで値切られてもアトに引かなかったのも、要はこの信念があったからのことなのです。

科学が進歩したのは、よいことですが、そこで発明された合理主義が万能になって、チョットやってダメなものはダメなんだ——という怠慢が支配し、不可能が可能になる喜びがどんどん消えてゆく。これは本当の科学精神ではないのですけれども、どうもこの似非科学が流行してこまるのです。心理判定員という、ひとよりも賢いと自認している懷疑論者を、日本中から集めて、婦人の村ができれば、どんなことをするのか説明したときに、まず開口一番でてきた言葉は、これだったのです。

そして、それは、こう続くのです——

「もし創造者の眼からみて、それが本当に無意味なものだったら、彼は即刻これを取り去られるにちがいない。……だから、そこに息がしているということは、神にとって、それが必要だということなのである。神が必要だといわれるものをわれわれが不要だという資格はない。われわれが、こんな人間は死んだほうがまし——と思うとき、われわれは、その人に対する冒瀆をおかしているばかりではなく、造物主に対する反逆をこころみているのである……」

私は熱するばかり、聴衆は冷めるばかり。あとでボソッと、廊下でささやかれた言葉は「神があれば……のはなしですね」

そこで、彼らはダメだとおもうゴミを捨てにくる。われわれは、それをタカラのように拾い抱きしめる——そういう操作が果しなく繰り返されたわけです。

死と甦り

それは一九六五年四月一日のことでした。まず兵庫県から五人の婦人が送られてきました。駅まで出迎えた私たちは、準備した旗を広げるまでもありません、いちばんあとから改札口を出てきた、田舎町でも目立つほど疲れはてた一行が、それでした。

おなじ五日には、岩手県から一人。東京都から一七人。

七日には、長野県から二人。

八日には、福岡県から五人。

九日には、静岡県から二人。佐賀県から一人。

一〇日には、岐阜県から二人。群馬県から一人。

一日には、北海道から七人。

ここで、さっそく入院さわぎがもちあがりました。最初にはいった兵庫県の年配者が、だんだん多弁になって、夜もねむれず、あちこちをたたいて、うわごとを言い始めたのです。精神科の先生にみてもらいますと、

「しばらくお預りしましょう」

ということになりました。

一日には、山形県から二人。

一日には、神奈川県から一人。

一日にも、神奈川県から二人。

一日にも、神奈川県から三人。

なぜ、同じ県から、三日にわたって、一人、二人、三人と別々につれてくるのか——あとになってわかりました。どれもこれも手におえない異常者で、一人に三人つきそっても心配だったからというのです。

はたせるかな、そのうちの一人がハンストをはじめました。自分分は、こんなところに来るつもりはなかった。工場にかよつていたものを、遠足にいくとだまして、ここにつれて来、そのまま置いて帰った——というのです。

いろいろ説得につとめました、ガンとして食事をとりません。あまり長びくと人命にもかかりますから、送りどけることにしました。復活祭の朝、みな山うえにあつまつて、歌をうたい、卵探しに興じているとき、若い牧師は、この異常者の手をとつて、春の海をわたつたのです。

のこつた四九名の婦人たちは、病床の二名をのぞいて、みな神妙にマグダレナの物語に耳をかたむけ、ルッター作・深津文雄訳のコラールを、幽かにうたいました——

「主は死にながれ 我が罪とけぬ
主は甦りて、生命をたもう……」

自然は医者

なんといつても、ありがたいのは、海もあり山もある、内房のやさしい自然でした。

田のくろにニヨキニヨキ頭をもたげたツクシをつみ、浜辺に小さな貝がらをひろうとき、どんな人も、例外なしに、幼な心にか

えるのです。そして、お母さんのはなしをしてくれたり、古里のことをかたりはじめます。

けれども、フトわれにかえつて、こんな寂しいところには、ひと月といられない——と泣きたすものもあります。マチの華やかなにぎわいや、ネオンの光がこいしいのです。そして、大事そうに歌手の写真でも見せて、流行歌を口ずさみ、

「たまには、お酒もいいじゃない？」

どうしてタバコすっちゃいけないの？」
つてききます。

ながい、みだらな生活が、彼女たちを深く汚染しているとしても、生まれたときから売春婦だったひとはひとりもありません。きつと、この自然のふところで、生まれたままの嬰兒にたちかえるにちがいないと、できるだけ不健全な文化財は遠ざけ、つとめて自然のなかで自由に遊ばせました。

その遊びのむれに、指導員もはいつて、一緒に遊びながら価値を創造してゆく——それが作業指導というものではないでしょうか？

——きょうは山のうえまでいった。道がわからなくなったんで、枝をはらつておいた。

——きょうは木の根をほった。のどがかわいたから、谷水をくん

で飲んだ。

——すべるから、段々をつくった。ぬかるから、橋をかけた……。

そして、山じゅうが、いつしか美事な畑になり、みんな、よく食べ、よく眠るようになりました。お医者さんも、びっくりなさるほどに……。

自然との戦い

やがて、雨の季節がやってきました。

ギリギリまで居住棟にかけてしまった残りの物置みたいな作業棟はゴッタがえし、ほっとおけば、肘がさわった、息がかかったでけんかになります。女子の指導員が、ありあわせの古毛糸をもちだして、手仕事をやらせてみましたが、ものになりません。

どうしても袋はりがしたいという人のために、寮舎の板の間にゴザをしいて、ボール箱を台に、古新聞をノリではる作業をはじめた指導員もいましたが、袋にはならず、捨てるばかりでした。

大雨が降ると、必ず、どこかで崖くずれがおこりました。ほっではおけないので、深夜、男どもが総動員され、ズブぬれになって、水路をかえるために戦いました。そんなとき、ふと傍らに、たのみもしない女性の影をみつめました。彼女たちは義侠心にとんでいるのでしょうか？

とうとう、崖くずれがおこり、一つの寮を避難させねばならなくなりしました。さいわい六つの一つが空いていましたので、行くところはありましたが、不健康な婦人をまじえた一〇人の引越は大変でした。しかし、みんな出てきて、よく手伝いました。

その翌日から、土方の仕事を始まりました。急傾斜の山肌をならして建てた一〇軒の村は、それから一〇年間、コンクリート作業にこつかなかったのです。

「女には無理だ！」といわれるが、金がないばかりに、全員一丸となって、高い擁壁を築きあげ、一人の犠牲者もださずに済んだとき、言いようのない勝利感がわれわれを一つにしました。

もちろん、はじめは、専門家に相談し、おおよその予算もたててみました。その資金をどこに見いだすか、あちこち言われるままに歩いてもみしました。もし、そこで、うまい話にぶつかり、補助金でも出て、業者に発注し、大工がはいりこんでいたら、こんな爽かな魂の成長はおこらなかったことでしょう。

水が出ない

夏がやってくると、井戸が枯れてしまいました。そもそも、房州——と決めたときに、あちこちから念をおされたことは、これでした。

「房州は、水がないが、だいじょうぶ？」

「あんな山の奥に家をたてても、水道は引きませんよ！」

それをききながして、どうにかなるだろう、どうにかしてみせる——と、一二〇メートルのサクセンをほったのですが、それが失敗でした。汗をかくときに、一人一日バケツ一杯という厳しい制限。そこへ次々に海を目あてのお客様！

「かにたは良いとこだけど、水がないのは困ったものねえ」

職員など、自分のふろには入れたのは一回きり。しまいには、寮生を三〇分も歩かせて、銭湯通い。そのうちにふる屋から文句がでました。

「ほかのお客さんがいやがるから……」差別もひどいものです。理由は、どうも、性病らしいのです。

ところが、ふしぎなことに、元売春婦の村に、性病がないのです。ないといつては、言いすぎですが、きわめて少ないのです。それは、彼女たちが、ここへくるまえに、治療をすませてきているからです。婦人保護施設には、どこでも、特に「病人風呂」という設備をしているのですが、かにたでは、それを使う必要がない、それほど……なのです。

そのことをふる屋に説明しましたところ、よくわかってもらえましたが、それならば、そのことを証明するものを掲示したい——

「保健所の証明書でも——といいます。それこそ、堂々たる差別ではありませんか？ 私はいいました——」

「それは、おやすい御用。だが、なぜ、われわれだけ、無い病気の証明を掲げねばならないのか？ ほかのお客にも、無病証明書を要求しますか？」

まったく、性病患者は、町には、一〇人に一人の割合であふれているのです。相手は、それっきり、だまっしてしまいました。

この争いをききつけて、地方新聞が、それスキャンダル——とばかりに、やってきました。私は、いいました——

「天下の公器は、弱いものの味方をするはずではないか？ これだけ、われわれが困っているのに、ほっておいて、いいのか？」すると、三面のトップから、窮状を訴えてくれました。おかげで、市役所は日に何度も給水車を回し、ついに水道をひきましょう——ということになりました。

さあ、こんどは、みんなで、受水槽をほらねばなりません。

リズム回復

夏は、海風がふいて、東京よりも涼しいのですが、でも午後の外作業は楽ではありません。まして、身も心も疲れはてている彼女たちにとっては苦役です。作業とは苦しいことだという労働観

はできるだけ避けたいときでしたから、先取りして、夏時間としゃれました。

夏時間——と、われわれが呼んでいるのは午前中すべてを三〇分早くすること——ただそれだけなのですが、午後は毎日、海にゆくことにしました。管理者として、海水浴ほど気のもめることはありません。げんに、この浜でも、毎年一〇人や一五人の犠牲者は出ているのです。ために、海はそこにあっても、引率者がいないので、海水浴は禁じられている施設もあるわけです。

よく点呼し、よく説明し、わたくし自身必ず先頭になって、おそれず、楽しく実行しました。

この人たちの海水浴って、どんなものか、想像つきますか？なんでもないので。裸になれば、みな同じ。どこかの学生でもない、すこし太りすぎの、脚のみじかい、無器用な……。いささかほにかむ彼女たちを、むりやり深みにつれだして、あたまから潜りでもおしえると、すぐ水になれました。

帰って、午睡すると夕食。片付け終わると、夜は毎晩のように踊ります。これも、はじめは、品のよいフォーク・ダンスかなにか——と思ったのですが、のつてきません。やむなく、ヤグラをくんで、タルをあげ、大漁節だというと、さきを争うように集まり、なかなか上手です。

ここで、つくづく知らされたことは、「人間は、いきているかぎり、リズムだ」ということ。リズムがおかしくなったらネジをまいてやればいい。それがへかにた音楽療法」とよばれるようになったメソッドです。集まるごとに歌います。そのレパートリーたるや大変なものです。彼女たちは、英語でも独逸語でも、ラテン語でもヘブル語でも、なんでも覚えます。どんな複雑なカノンでもいつしか征服します。ことに降誕祭のページェントなど、遠くからまで見にきて、みな喜んでくださいます。

手仕事

秋になると、幸運なことに、ひとりのおとなしいお嬢さんが聖公会の司祭につれられて就職にこられました。編物が上手だとのことでしたので、長いあいだモタモタしていた内作業の陣頭にたつてもらいました。

この村にくるには知能がありすぎるが、さりとて社会復帰は困難という、性格異常のひどい人たちがあつまりました。そして技術を覚えるというよりも、先生の取り合いです。きかないでもいいことを聞きにゆき、なおさないでもいいものを直させます。

しかし、女性にとって、静かに手をうごかしているのはたのしいものです。……なぜ、こんなところに來たのだろう？ これか

「先は、どうなるだろう？ 肉親はどうしているか？ 別れた男はどこにいるか？ ……次々と内省し、ボツンとおもしろいことを言います。あまり、おしゃべりに力がはいって、手先がおるすになっても困りますが、問題は生産ではなく、生産をおしての治療ですから、アブクのように出てくるものを迎えてはいけません。内作業はたのしい——と感しさせる、その連続が、彼女たちを素直な人間にたちかえらせるのです。」

しかし、はたして何ができるかわからない練習に、新しい材料は使えません。町の婦人会におねがいで、着古したセーターなどを寄付していただきましたところ、どっさり集まりました。これで材料にも不自由しませんが、解く仕事も、洗う仕事もできました。

ひとり、腹をたてると、金棒で相手の頭を打つ、キツネのように目のつりあがった女性が、編むことはできないが、解くことが上手で、解くものがあるあいだは機嫌がよいのですが、ひとたび解くものがなくなると荒れて困る——ということがありました。係が「解くものがなくなりました」というと、私共は、着ているものまで脱いで出さねばならなかったのです。

パン屋の娘

本にもなっていますから、お読みになったかたも多いと思いますが、私共へ最初に助けをもとめてきた女性が、一六歳で売られたパン屋の娘でした。この人は、その後一六年間たいへんな苦海をわたって私共の所へつくともなく不起の身となりました。しかし信仰をえて祈りつづけてくれた、そのおかげで、かにた婦人の村は出来たようなものです。

彼女は、元気なとき、パン屋をひらいて更生するのが、その夢でした。だんだん、その話が煮つまって、ブロックを積んだり、機械をすえたり、職人をやとったり、やめさせたり……。それがついに成功して、いまでは、毎朝みんなの口にはいる、それはおいしいパン、そのほか素晴らしいクッキー、ケーキなど、ちょっと市販では味わえないようなものを、どんどん作っています。

これは、売れ、売れ——といわれるのですが、店頭にさらすことはしません。というのは、商品となれば定価がつきます。定価をつければ、つい他所の製品と競合します。マージンをとられます。つい材料をおとし、保存のきく薬品を用いざるをえなくなるからです。商品に、おいしいものなど、ないわけです。

ついでに、農作物についても、同じことがいえます。せっかく汗水ながして作ったものは、まず自分たちで、おなか一杯たべることになっています。労しても、実をもちさられるのは、うらめし

いものです。

あまれば、市場に出さないこともありませんが、市場にならべるのには、色々な規格があつて、それになうためには、農産をたっぷり使わねばなりません。野菜など、形はどうでも、味がよければ、それが一番なのに、近ごろは商人におしきられて、農民が非良心的になりました。われわれは、原始的な自然農法で、自分たちの腹をみたせばそれでよいことにしています。

とにかく、インフレがあたりまえになつてしまつた悪徳政治のもとでは、金をあてがわれて生きよといわれても、方法がありません。金をすてて、必要なものを作ること——その創りだす喜びが、人間を癒すのです。

縄文人

どこへいってもたたずんでいるだけの人がいました。知能がひどいのです。ほとんど言語伝達が不可能ですから、だれも指導できません。でも、体は丈夫だし、何かしたいのです。私は思ひきつて、マッチを与え、焚火をさせてみました。彼女は感激して、マッチをすり、一日火のそばを離れませんでした。いまでは、村中のゴミを集め、石造りのカマドで処理する作業に生きがいを感じています。

「カミシナカナ、ミカンノカワ、イレテ、コマーマス」

食堂で、手をあげて、叫んだ、彼女の第一発言はこれでした。

もうひとり、キーキー泣いて困るのがいました。なにもさせてもらえず、指導員に叱られどおしです。妻が、よんできて、絵をかかせてみました。すると、目をかがやかせて、すごい絵をかきなぐりました。その部屋にはだれもいれてもらえないので、その様子を見たことはありませんが、あとで会議室の床いちめんに並べられているのを見せられたとき、まったく知らなかった秘密が開かれたように思いました。

次の年、わたくしが自分で陶芸をはじめたとき、この娘はすぐに掃除に来てくれました。そして、人間が大昔やつたであろうとおりにたくましく粘土とたわむれました。はじめは無数にオダングをつくりそれにあきるとオセンベにつぶし、やがて長いヘビをつくり、そのヘビをオセンベのうえにまきつけて、カゴにしました。その穴をつぶすことを教えると、美事な縄文式土器になったのです。

「この娘は、生まれるのが一万年おそすぎただけのことだ！」

わたくしは、彼女を縄文人とよぶことにしました。数は三つがやっと、文字は一字だけ、名もしらず、本籍もわからぬ娘が、造形美術にかけては、この村のチャンピオンになったのです。

雪よりも白く

これは、ここへ来るまえからわかつていたことなのですが、彼女たちは洗濯がすきです。洗濯というより水遊びかもしれません。水さえあれば、手が白くなるまでつけています。

「洗濯機がゴーゴーとおとをたて、

白い泡がグルグルまわっている。

オレもこのなかへはいりたい」

という詩があるくらい。彼女たちは何かを洗いたがっている——とは、ある深層心理屋の説明です。

それなのに、水がたりないばかりに、シートまで外へだして、始末でしたが、やっと近ごろ、農業用溜池のいらなくなったのを引けるようにして、洗濯作業がはじまりました。ここも、きわめて知能のひくい人が、怪我ひとつせず機械を操作し、病人のよごしたもので喜んで洗うさまは、チョットした圧巻です。

どこでおぼえたのか、古い賛美歌の一節が窓から流れてくると、きくものによつては涙がでます。「わが罪をあらいて雪よりも白くせよ……」罪といわれても赦しといわれても、いまのわれわれには、まったくピンとこない教えですが、彼女たちにとっては、どこへいっても、いつになつても忘れたらえない過去

を、しっぽでも切るように赦してもらえるのは、ここだけだと体で知っているのです。

このほか、調理のすきなものもあれば、木工や土木のむくものもあり、店番がしたいものもあれば、看護がしたいというものもあり、トリをかうものもできれば、ウシをもらつてくるものもあり……で、十二年たった、かにた婦人の村は、指導員のかずより多い作業班がズラリとならんで、だれもが、なにかを、喜びいさんでやっています。

これは、彼女たちがここへ来たとき、何もなかった——ということのおかげ、だれにも強いられずに、遊びのなかから自分のしたいことを見つけていった結果だと信じています。

かにたでやったような作業指導の方法を、一冊の本にしたらしいといわれますが、バカバカしくて書けません。偶然があり失敗があつてこうなつたので、それを説明することも困難ならば、それを理論づけてもウソ、ましてや、「このとおりやれば、このとおりになる」というものではありませんまい。

なにも、かにも、くりかえさない、一回かぎりの出来事。

だれも、かれも、かけがえのない、一粒よりの人間。

——それで、いいのでは、ありませんか？

(かにた婦人の村施設長)